

あるじのいなくなった家

これまで大切な人の暮らしがあったのに
その日を過ぎた夜から明かりがなくなった
近頃は病院で亡くなる人が多い中で
最後までその家守り一人旅立った

それほど苦しんでいた様子もなく
まるで蠟燭の火が消えてしまうように

愛してたパートナーに
今頃やっと会えただろうか
親しかった多くの人たち
今頃やっと会えただろうか

全く元気でそんな気配ひとつなくて
覚悟もできないままに突然の知らせ
自分もたまたま退院したばかりの時に
最後まで見届けてくれて一人旅立った

その朝会った人にも丁寧な応対
誰がこんなことを想像しただろうか

愛してたパートナーに
今頃やっと会えただろうか
親しかった多くの人たち
今頃やっと会えただろうか

トンネルの向こう

あれは確か5年生の頃だった
幼い近所の友と歩いてた
初夏の眩しい光が見えていた
できたばかりのトンネルの向こう

あかりもついてなく舗装も終わっていない
しばらくそのまま工事もしない
暑い夏の日を心身ともに涼しく
ふざけ合って怪談しながら

後ろを見ないで足早に
暗いなかをひたひた歩く

僕ら以外の見えない誰か後ろから
ずっと追いかけているような音がする
かなり前のことだけど鮮明に
こんなところはもう一人では歩けない

しばらく歩いてトンネルの向こうまで
大きくなってきたかまぼこの形
切り取った空と緑の風景のなか
見えてきた棒は電柱なのか

天井に見えてる白いシミが気になる
傍に落ちてる袋も気になる
暑い夏の日を心身ともに涼しく
たくさん歩いて疲れたはずなのに

やっと近づく向こうの風景
辿り着いたら普通の景色

僕ら以外の見えない誰か後ろから
いつの間にか遠ざかったような気がする
かなり前のことだけど鮮明に
こんなところはもう一人では歩けない

今すぐに

あと少しの命言われたら今すぐに
しなければならないこと
したいことなんでしょう

人生の残り時間
意識することなかった
本当に欲しいもの
考えても見つからない

でも守りたい家族の幸せ
残される親族の幸せ
そして関わる全ての人に
メッセージも残したい

そんなふうに考えると
今すぐにしなければ
ならないことは人を
笑顔にするためのこと

人は誰でも必ず死ぬのに
死なないと思って
生きてるものだろう

本当になくなったなら
周りの人はそれこそ
仕方ないと思うもの
自分の意識もなくなる

そんなところで無理に今すぐに
しなければならないこと
そしてしたいこと考えすぎても
あまり意味のないことかも

そんなふうに考えると
今すぐにしなければ
ならないことは目の前の
悔いがないようにすること

あと少しの命
言われても慌てずに
人は誰でも
いつかは死んでゆく

帰りついた駅で

電車降りたら
夕方 5 時過ぎなのに
薄い青空 筋雲を抱えて
今しがた止んだ雨
これからの時間
過ぎるのが惜しい

駅のホーム水たまりが白く光る
反対についた電車に照り返すよ
駅を降りて西側の広場に出て
眩しい西の太陽が作る
くっきり長い影

今日はいつもより
早く帰り着いたのだから
駅前のスーパーで値引きのスイーツを
濡れた道日に照らされ
地上に長く伸びる
さながら天の川

広場のベンチ早くも乾いていて
子犬を休ませる親子が座っている
その傍に立つ大きな楠の木
行き交う人見下ろしながら
その葉を揺らす

逃げてゆくのもって

ここには私がいるべき場所はない
今さら頑張り続けたところで

少しも良くなならない
居づらさあるだけで
関わる人ともうまくいかない

抱えきれぬ悩みから
解放されたくて
この先のことが見えなくなった時

休みたい気持ち強くなった頃から
最後の手段のひとつとして

逃げてゆくのもって悪いことでない
「ここしかいられない」
思い込んでるだけで
自分で縛った責任感だけで
周りはそれほど
思っていないに違いない

今あるイザコザ
解決するよりは
全てを投げ出して任せるだけでいい

いなくなった後の気まずさなんて
想像する意味あるのか

消えてしまいたいと思った時には
口にもできない
気が滅入るだけで
そのうち疲れて動けなくなるより
逃げたその先を
考える方がいいかも

逃げてゆくのもって悪いことでない
「ここしかいられない」
思い込んでるだけで
自分で縛った責任感だけで
周りはそれほど
思っていないに違いない

新緑の銀杏並木

あるきっかけでこのところは
バスで何度も通ってた道
元気になって運転できて
初めて走る自家用車の窓から見える
まっすぐな並木道

こんなところにあるはずがない
と思っていた市街地の中
道の両脇迫ってくる
同じ高さの緑の壁が高すぎて見える
新緑の並木道

今まで一度も気づかない
いつものバスからの視線では

新緑の銀杏明るいほど
お昼過ぎの光に輝く
高い緑の明るさが
いまの喜び与えてくれる

右には広い市場があって
食堂とかもある様に聞く
左は長く伸びる公園
駐車場もなく一時停止もできないだけに
歩いてみたい菅生緑地

ホームセンターを過ぎたあたりで
直角のカーブ曲った途端
センターラインの壁がなくなり
少しホッとして視線を上げた瞬間に見える
いきなりの並木道

なんでもないバスどおり
元気になったご褒美

新緑の銀杏明るいほど
お昼過ぎの光に輝く
高い緑の明るさが
いまの喜び与えてくれる

夏つばき

夏の初めのある日のことだった
一夕に満たない思い出 儚い記憶
気心知れた友達に助けられて
そしてあなたと三人語りました

緊張していた僕を友達が和らげるように
気の利いた話をして盛り上げてくれた

一度きりなのにかなり前なのに
はっきりとそのこと覚えています

まだお酒も飲めなかったウブだった僕は
ソフトドリンクだけでやけに気取って
冗談すら言えずにただ生真面目に
相槌するだけでときどき間抜けな発言

それでもあの時のあなたの笑顔は明るく
けして作ったものでなく僕に向けてくれた

一度きりなのにかなり前なのに
はっきりとそのこと覚えています

夏つばき咲く道 帰りの道で
このまま別れる 辛さを感じて